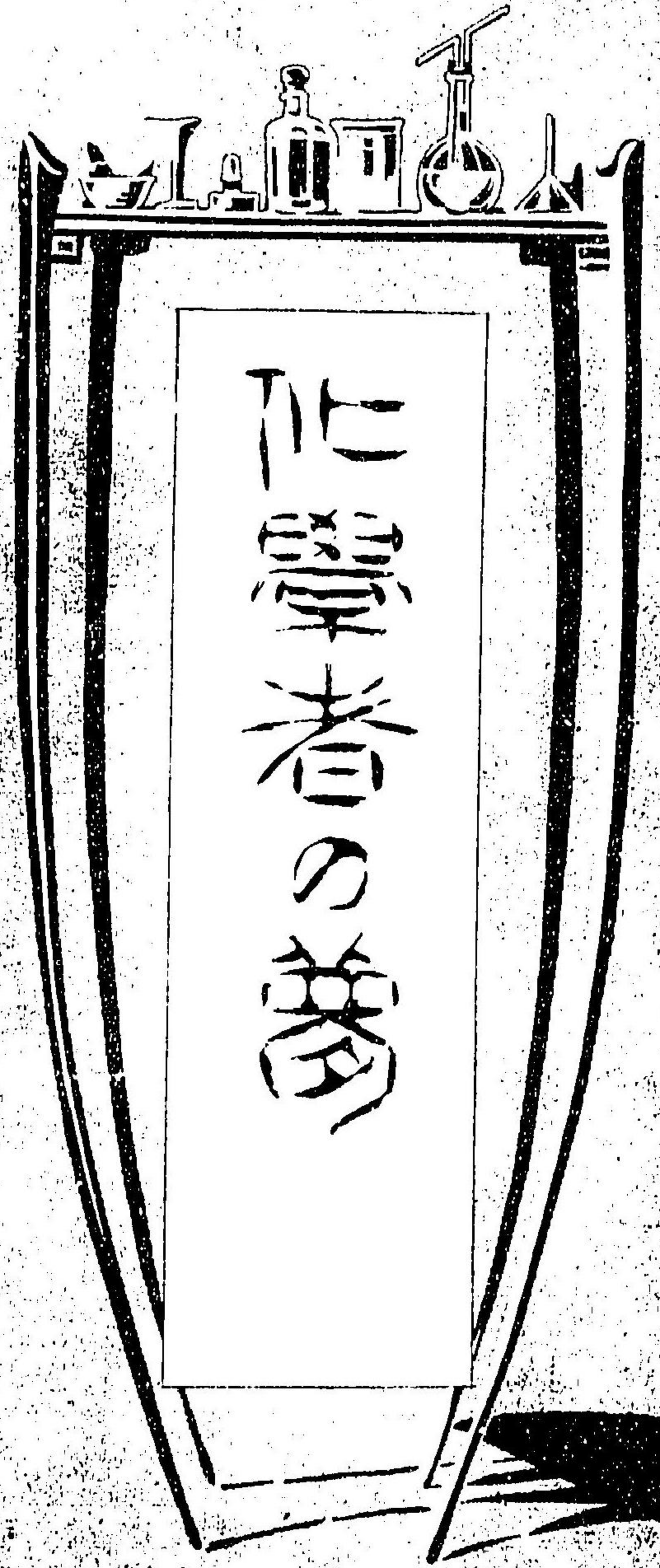


33  
466



理學博士 藤田鳴鶴 著

東京 丸善堂 發行

# 化學者の夢

戦々道士戯著

明治

39 5 8

内交

はしがき

近年、世の人々は相競うて、海濱又は温泉場に遊びて、都市の暑さを避くる慣いと盛んになりけるが、著者はあながち世の流行に逆ふとはあらざれども、生來、かやうなる華美やかなることは、あまり好まざるが上に、著者の寓居は、かけまくも畏き鳴の御社の樹木鬱蒼たる糺の森や、清き流の御手先川の畔にて、すでに、靈元院天皇の御製にも、

夕つくひもらぬ木陰にやすらひて

むすぶ手涼し御手洗の水

又續千載集に、

わきてまた涼しかりけり御手洗や

御祓にまさるよはの川風  
などありて、暑さを消し涼さを納るゝには、こよなきところと思へば、わざ／＼もとめて、他に暑さを避くるにも及ばず、ことに、我住む家ほど氣樂なるところもあらざる理りなれば、いつも家に籠りて、讀書などするを樂みとせしが、この夏は午睡の暇を利用して、戯にこの一話を綴りたるに、終に積りて小冊子をなしたれば、さる友人の勧めに由りて、こゝに梓に上すことゝはなせり。

明治三十八年八月

水鳥の鳴のかりゐにて

著者しるす

## 化學者の夢

戦々道士戯著

春の日和のうらゝかに、桃や櫻の花盛り、鳥の鳴く音もあつちるく、心長閑に晴れわたる彌生なかばとなりぬれば、學生界の人々は、この休暇を待ちつけて、父母を故郷に訪ふもあり、或は學業の實習に旅路に出立つ者もあり、これ畢竟、一年このかた長の月日のその間、一心不亂に耽りたる學業の疲勞を休めんとての事にして、いづれもいづれも思ひ立つ中に、日頃化

學に熱心なるひとりの學生は、學びの旅を思ひたち、輕装の洋服身に纏ひ、手には輕き小カバンと蝙蝠傘とを携へて、汽車にうち乗り立出でしが、その速力いと早く、思ひしよりは速に目指す驛にぞ着きにける。足はやに車を下りて野邊に出で、四方の景色を眺めつゝ、獨りぶらく行くほどに、霞棚引くその中に、草木の花は咲き亂れ、鳥は囀り、蝶は舞ふ、春の天地の美しさ、いふにいはれぬ好景色に、暫時見とれて居たりけり。

彼は高等の教育を受け、知識に富める身にしあれば、目に觸れ耳に感ずる事物に付きては、忽ち觀察、推理

の念起り、進んでその眞理を究めんとする心益々盛なれば、尙ほ宇宙の洪大なる、幾多の事物は隱蔽せられてあるならん、探り出して、人間の學問、知識を進めんことを勤むるは、學者の本分にして、歡樂これに過ぐるものはあるましとの感念は、常に腦裏に滿ちをれば、觀るもの聞くものにつけ注意の周到なる、まづ路傍の畑に生育する麥を見ては、忽ち想ふやう、これは冬の初に種を下し、翌年の夏にいたりて刈取るものなるが、その穂の出るも將さに遠からざるべし。麥には大麥、小麥の別あり。大麥とは小穂が一の花よりなりて、穂軸の節ごとに數箇あり。小麥とは小穂が三

の花よりなりて、穂軸の節ごとに一箇あるものにして、いづれも葉の形は細長く、多くの細脈縦に並行す。葉身の下には、長き鞘ありて稈を包む、尙ほ細にこれを解剖すれば、單子葉植物に屬し、稻、粟、玉蜀黍トウモロコシと同科の植物なるに相違なし。麥の粉は、いはゆる、うどん粉で、ばんを製する米利堅粉メリケン粉もまた同じものなり。その多分は澱粉よりなり、又蛋白質の一種なる麩質を含む、ゆゑに吾人の食する麩はこの麩質よりなり、うどん粉を水にてこね、鹽を加へて布の袋に入れ、水中にて揉み澱粉を押し出して製するものなり。麥稈は夏帽子の製造に廣く用ひられ、その實質は纖維素よりなり

り、その莖の硬きは珪素を含むがゆゑなり。この纖維素てふものは、すべて植物の體を組成する主成分にして、試みにその殆ど純粹なるものを擧ぐれば、生綿や麻等なり。紙は纖維素よりなるがゆゑに、稈を以て紙を製するはこの理に由る、又近頃の發明に係る無煙火藥や人造絹糸、その他角、珊瑚、象牙、鼈甲などの模造品を製するセルロイドは、いづれも皆纖維素より造くらるゝものなりと。

かやうに、種々の方面に學問上の思想を凝らしつゝ、徐に田畑の畔路わきみちを辿り行きしに、日光に映して耀ける石の一片の、路傍にころがりあるを見つけ、拾ひ取

りてつくく打眺め想ふやう、これぞ花崗岩の破片  
にして岩石の一種なり。岩石には水成岩、火成岩の別  
ありて水成岩とは、空氣や水の働きにて碎けたる鑛  
物の破片や粉末が、水の底に沈澱し、かたまりて出  
來るものなるが、石板石や砥石などは、即ちこの類なり。  
火成岩は、地中にて火熱の爲めに融けたる鑛物が、地  
上に噴き出で又は地中にてかたまりたるものにて、  
花崗岩や安山岩などはこの類なり。そもく花崗岩  
とは、石英、長石、雲母の三種の鑛物よりなり、其割目に  
黒く平らたく見ゆるものは雲母、白く光るものは長  
石、ガラスの如く耀けるものは石英なり。彼の陶磁器

を製するに用ふる原料の陶土、磁土は、珪酸アルミニ  
ウムにして、花崗岩が空氣や雨、雪霜などの働きに由  
り、長石の分解より生したるものなりといふ。  
花崗岩の破片を見てさへ、色々の感想は忽ち腦裏に  
浮び出で、眞に面白きこと限りなければ、獨り笑みつ  
ゝ歩足を進むるに、小さき川に出逢ひたれば、又つら  
く想ふやう、この川は溝の如き小流なれども、かや  
うなる小川の多くが、諸方より漸々集りきたりて、大  
なる河流となり、終に海中に流れ入りて、大なる水の  
體をなすものなり。水は元來その中に物質を溶かす  
性質の著しきものなれば、かやうに遠き距離を流れ

て海に到る間には、その觸るゝ土地より多くの鹽類  
を溶かして海に入るを常とす。こゝにて、又水は太陽  
に熱せられ、その鹽分を残して緩々蒸發し去り、昇り  
ては雲と化し、降りては雨となり、再び陸地に降り注  
きて、又もや河流をなし海に流入する等、水は絶えず  
循環して停止するものにあらず。これ海水中に鹽分  
の多く存在する所以なり。この小さき川の水は、まこ  
とに清く碧く澄みて見ゆれども、その中には、必ず微  
生物の發育し、種々の汚穢物をも混するものとかや。  
水中に微生物の現存することは實に驚くべきもの  
なれば、今何人にも、汚水の一滴を試みに顯微鏡に

て照し見なば、實に無數の微生物の活動するを視る  
べし。この微生物こそ、人生の利害に大なる關係を有  
するものなれ、されば熱病、赤痢、虎列刺などの悪疫は、  
凡てこの微生物に發因するものにして、この種の病  
氣は、往々不良の飲料水に由りて蔓延することあり。  
吾人の日常欠くへからざる食物中にも、微生物の働  
きを俟ちて始て成生するものあり、たとへば酒、醋、味  
噌、醬油、澤庵漬など皆然らざるはなし。これらは畢竟  
微生物が有機物に寄生して、非常に速にその繁殖を  
なし、醱酵や腐敗と稱する複雑なる化學的變化を引  
き起すがためと知るへし。水は地球上最も廣く配布



せられたる物質にして、吾人の生活には片時も欠くべからざる大切のものたるはいふまでもなく、宇宙間に於けるその働きは千種萬様、實に至微至妙なりといふべし。このものは、化學上にては水素と酸素との化合物に過ぎざれども、天然には純粹のものはあることなし、されど蒸溜すれば殆ど純粹の水となる、たとへば雨は地球上の不純水が太陽の熱に由りて蒸發し、再び收縮して出來たる天然の蒸溜水に外ならず、など獨り學理をくりかへし居る中、噂をすれば影とやら、今まで長天萬里無一片雲とも稱すべき好天氣の空合も花曇りとやらで、いつの間にか一面俄

にかき曇り春雨のぼつ／＼降りきたりたれば、こりやこりしては居られぬと、雨宿りすべき場所を近くに索むれども、廣き野路のことなれば、ほど長き場所もあらず、困まりはてゝ吐息つきつゝ、

走り行く汽車の中をば出しより

雨の下にはかくれ場もなし

なんどゝ口吟しつゝ、足を早めて、あちらこちらと、うつき廻る中に山路の麓に出で、ふと見れば、斷崖の下に一の大なる岩窟あり、こは屈竟と急ぎ立寄りて、こゝに雨宿りしけるに、白晝なれどその中は暗さは暗らし、何んとなく物寂しくして、凄きこといはん方

なし。雨の晴るゝを待つ間暫く傍の石に腰うちかけ、  
両手を拱き首を垂れ獨り思案にくれつゝも、宇宙の  
宏大無限なるを想像しては百感胸に満ち、森羅萬象  
の盡く至微至妙ならざるなきを聯想しては、到底人  
智の以て思量すべからざるものあるを悟り、終には  
萬物の靈たる人類の位置を考へては生物の進化論  
を想ひ起し、物質の本源に付き思考を凝らしては彼  
の電子説を腦裏に浮べ、はては我身の行末までを思  
ひ廻す折から、岩窟の奥にかすかに人聲の聞ゆるや  
うなり、不思議千萬なることかな、かゝるところに人  
の住むべき筈もなし、狐狸妖怪の所爲にはあらざる

か、さるにても、たゞさであるべきかと、大膽にも勇を  
鼓して、聲をたよりに徐に奥へ奥へと歩み行くに、次  
第に聲は近くなるに従ひ、正しく人聲に相違なけれ  
ば、耳をすましてよく聞けば、如何にも多人數寄集り  
たる模様にて、中には笑ひ興する聲なども洩れて、さ  
も嬉しげに聞きなさる、不可思議も亦千倍し、是非と  
もその實相を見届けられんと、聲を知るべに探り行  
けば、あら奇怪なるかな、俄に夜のあけたるが如く、ま  
ばゆきほど明るき廣大なる岩室に出てたり。自分な  
がらも驚きて、内部の様子を差覗けば、異様の人物數  
多寄りあつまりて、何事をかなす様に見えければ、眸

子を定めてつく／＼とその人物を眺むれば、豈圖らんや常に親しく交はれる七十有餘の元素達にてありけり。噢驚しながらも先づこの方より聲を掛けんと思ひしに、彼等はこの時早く既にこちらの顔を見つけ、いづれも周邊に寄りきたり、歓迎の意を表しぬ。學生は、元素某にうち向ひ、この大會の由來を尋ねしに、某氏のいへるには、これぞ我々お十有餘の元素共がその眷屬を率ゐ、一大團欒を催し、將來尙ほ互に親和共睦して種々の結合體を組織し、學問や工業上其他國家のために、あらゆる利益を圖り以て我等の本分を盡さんことを獎勵する主旨に出でたるものな

るとの答へに、始て大會の謂れ因縁を聞き知り得たれば、驚きもやゝさめて、室内の裝飾と元素諸氏やその眷屬達の扮装とを見廻すに、まづ室の入口にはレトルトの形を赤地に白く染め抜きたる旗二旒を交又して掲げ、室内にはその天井よりさがれる數多の鐘乳石を利用して電氣燈を幾百となくつるし、壁には水晶やルビー、トパツズなど種々の寶石の結晶を挿めて飾りつけ、電氣燈はこれらに映して色々の光彩を發し、その美々しきこと言語に盡くしがたし、又室の中央には、箭石を以て脚となしたる大理石の卓子をいくつともなく据ゑつけ、その上には香氣馥郁

たる草木の花を大なる薬瓶にいけ、室の周囲には古  
來化學界に功績顯著なる碩學大家の大理石像を並  
べ、美麗なる花環を以て飾られたり。

この室内にあつまれる人々は、或は空氣中よりきた  
れる者もあり、或は遠き地中より、或は深き海底より、  
遙々歩を拄げたる者もあり、或は動物界又は植物界  
より來會せる者もありて、種々異様の人物のみ多き  
その中に、一際目立ちて見えけるは、身には銀色の衣  
服を着け、容貌白く麗はしく、立居振舞活潑に、室内を  
左右縦横にかけ廻り、頻に周旋の勞を取れる者これ  
ぞ水銀と稱する敏捷の青年にして、大會委員の一人

なる。今日、この男の擔當は煖房係と天候の觀測係と  
を兼ね、絶えず寒暖計の昇降に注意し、始終室内の温  
度に變化なきやう勤めたり。加之、來會諸氏が遠く空  
氣、海、陸、動植物界の諸方に向ひ歸途に就くに際し、天  
候に變化ありて雨降り風起るやうのことあらば、  
臨機應變の措置を取るの準備を豫めなしおかんと  
て、時々刻々晴雨計に留意しつゝありけり。天井の裏  
や壁の側を四方八方に奔走し、電氣の運搬と電氣燈  
の點火とを指揮しつゝ、顔色赤く身には衣服は綠色  
のものを纏へる人物あり、これなん吾人の常に親密  
なる銅氏なれ。氏は元來學問上や工業上國家のため

盡くせる功勞著しければ、大に世人の尊崇を受け、殊に氏は諸種の器械は勿論鍋釜、藥罐などの臺所道具その他針金板などの製造はいふに及ばず、金銀貨幣の鑄造にいたるまで與て大に力あり。その一族の眞鍮、青銅などいへる人々も、國家の事業には有要の材なり。銅氏の血族には種々様々の人物のある中にも硫酸銅氏は雑多の技能に長し、或は鍍金をつけ、電池を製し、染物をなし、顔料を造くり、時としては眼病を治するにも妙を得たりとかや。

今一座の貴婦人を見渡すに、けふを晴れといづれも流行の華美を盡くせる綺羅錦繡を装ひて、室のあな

たこなたに紳士達とうち交り、面白そうに四方八隅の話に餘念なき有様は如何にも優美に楽しく見えけるに、取りわけ中に目立って見ゆるは格魯倫夫人なり、年齢は三十四五とも覺しく、綠色の薄衣を着し、飄然室内を軽く歩行しつゝ、莞爾と笑める。顔は薔薇の露を含める風情にて、みやびやかなるそのうちにも刺ありて、其天性外には溫和の容姿を顯はし、内には剛毅なるところあり、常に弱きを助け、強きを制し、善を勧め、惡を懲らせる舉動多く、風采の凜々として犯すべからざるものあるは、宛然人をして畏敬の念を起さしむ。特に人々の注意を引くものは花顔玉姿の

二〇  
妙齡なる佳人の一群なり。みな姉妹と覺しく、黄色の衣裳を纏ふもあり、緑色の帯をしむるもあり、橙紅色の袴を着するもあり、その美しきこといはん方なし。これは、そも別人ならず格魯母氏の令嬢達にして、いづれも沈着ておとなしく、かりにも浮華なる振舞のなきは、格魯母氏家風の然らしむるところならん。少しく時刻を後れて、急ぎ室内に入來れる一婦人あり、鼠色の上衣を着をりしに、室内の暖さに止を得ず、上衣を脱したるを見るに、下には名狀すべからざるほど美しき紫色の衣裳を纏ひ居り、あつとばかりに見る者を驚歎せしめしは、これを誰あらう、名聲赫々

たる沃度夫人なりける。  
室の一隅に、眞黒の衣裳を着て、悄然として座せる一老婦人あり、この人こそ夥しき眷屬に母刀自として敬ひ貴まるゝ炭素未亡人なれ、婦人の節操の高きは、歳寒の松柏もたゞならず、容色は已に衰へ、今は昔の面影だに留めざれど、一時は春の花秋の紅葉など、仰がれ、人をして殆ど神飛び魂消えしめたる身なりしも、一朝不慮の火災に罹り、末を契りし良人はこの時火焰に包まれて哀れはかなくこの世を去り、後に残りて手頼すくなき寡婦の身となりしより、まだ歲月も立たざれば、尙ほも喪中の身柄とて憂に沈める

容姿は外の見る目も憐れなり。殊に未亡人が亡き良人の冥福を祈らんと手にて爪繰る金剛石の數珠玉は、室内の電氣燈に耀きて、黒き衣服の間よりきらりとまばゆき光を放ちつゝ、奥ゆかしくぞ見えにける。未亡人は元來博愛慈善の心厚く、何事にもあれ温き心を以てする人なれば、如何に冷かなる心をもてる者も終に化せられて温くなるとかや、これこの婦人の徳性なりといふ。その傍には、たんさん子と呼へる令嬢が、母を撫はりつゝしとやかに坐を占めたり、嬢はいつもの如く飛んだり跳ねたりのおてんば舉動をなし、口沫を飛ばして得意にお饒舌をするかと思

ひの外打て變て、けふは、をとなく、身には雪を欺く純白の衣裳を纏ひ、その容の誠に冷靜に見えけるは、これ畢竟薄命てふ世に恐しき強壓を蒙りたるがゆゑならん。

炭素家の血族中に亞留凍嬢と呼べる奇怪の少女あり。けふしもこの會に列席し、香氣紛々と薫らせつゝ、座間の取持役を勤めたり。この嬢の特色は、貴賤貧富いづれを問はず、誰人の家にも宴會の催しあれば、必ず招待を受けざることなく、交際家なりとの評判高きも故なきにあらず。嬢は明眸秀眉の佳人といふにはあらねど、只淡白に水の如きさつぱりしたる

二四  
容貌を有し、一種恐るべき魔力を以て人を弄べる癖あり。春花秋月の宴にも亞嬢を招待せざれば樂しからず、苦寒裂膚夕も炎威燦金日も亞嬢の甘言に遇へば、寒さを凌ぎ暑さを忘るゝも妙ならずや、又亞嬢の香こぼるゝ容姿に接すれば、憂苦に沈める者は忽ち愁眉をひらき、喜悅に打たるゝ者はますゝその嬉さを加ふるなど、知らずゝ何人もその魔力に心酔し、彼女のために、生命も奪はれ、巨萬の財産も大厦高樓もいつしか消え失せて、跡なきに至るは珍しきことならず、眞に微妙不可思議の天性を有する婦人なりける。

1702  
V  
窒素氏の令娘にて、花顔玉肌のみやびやかなる姿の過酸化窒素嬢といへるも、亦この席に列せるが、深紅の衣裳をしどけなく纏ひ、電氣の燈光に照らされつゝ、指環のルビー玉とその光輝を争ひ美々しくぞ見えにける。殊に彼の舉動の輕きは、一目していかに優美なるかを察し得れども、何んとなく一種いふべからざる毒々しき性質あれば、人をして思はず嘔吐を催さしむ。

金屬派の貴女連の、今日を晴れと磨き上げたるその顔は、いづれも電氣燈の光に耀きて美しく、愛嬌は溢るゝばかり、ことさらに人目につきて壯觀いはん方



なく、歌舞の菩薩の來迎とや言はまし。尙ほ他に數多の貴婦人達の席上に列座するもあれど、一々枚舉に違なければ、これらは省くことゝして、これより紳士達の顔觸れを列舉すべし。

上席に、黄色の衣服を着け、沈着の風采を有する紳士こそ硫黄氏なれ。肉色のスポンを穿ち、錆色のフロツクコートを着するは燐氏なり、この人は極て無愛嬌の人物にて、他人より煽動らるれば忽ちやつきとなりて怒り出し、その勢實に當るべからず。又席上にその甥の燐化水素と呼べる青年あり、世人綽號して鬼火野郎といふ、伯父の燐氏に似て、極て無愛相の人物

なるが、頗る悪しき癖ありて、濫りに禽獸を毒殺するなど無益の殺生を好み、雨降りの暗き夜などには、墓場にかくれて、ふはくと顯はれ、旅人を脅したり、沼地に徘徊して、人の通行を遮ることなどを、こよなき樂とするがゆゑに、最も不人望の一人なり。亞留加里氏と交情深くして、最も親密の間柄と見え、頻に談話を交へつゝある紳士は、硫黄氏の一族中、名聲赫々四海に轟ける、硫酸氏なり。その人品骨柄を見るに、でつぶり太りて貫目も重く、常に沈靜の態度を取り、外貌は極て淡白に見ゆれども、性質は活潑豪膽の才子にして、何事にも負を取らぬ剛情の人物なり。

氏の學問界に貢獻すること多きは勿論、化學的工業の直接間接に氏の力に頼らざるものは殆ど皆無ならん、ために一國の商工業繁盛の度は全く氏の盡力の如何に由るといふほどにて、氏が從來學問や工業に關して、國家に盡せる功績は眞に偉大なり。依て世人の、氏を文明の誘導者として尊敬することの厚きは宜なりといふべし。尙ほ硫酸氏の親友なる硝さん<sup>Hel</sup>も鹽さんも、學問界や工業界にありては、有力の紳士なれども、到底硫酸氏の補助なくしては、その身を起こつること能はざるなり。

正面の扉を排して徐に室内に入來りたるは、惠比須

か大黒天の如く肥え太り、いかにも福々しき人相の老紳士にして、大判小判打交りの形象を染めぬきたる山吹色の耀き亘る衣裳を着し、泰然と椅子に倚りたるいかめしき態度はさながら王公貴人の趣あり、威風凛々邊りを拂つて見えければ、滿堂の人々はいづれも期せずして一時に低頭平身し最敬禮を表したり。この紳士こそは別人ならず音に聞えし黄金大に人なりけれ。氏の社會に及ぼす勢力の宏大なるは實に驚くばかり、大は一國の盛衰小は一家の幸不幸に至るまで、社會萬般のこと一として氏の力に依らざるものなれば、社會に於ける生殺與奪の權は氏に

ありといふも過言にあらず。今個人に付き、たとへていはんに、いかほど躍起となりて怒れる人も、鬱々と憂に沈めるものも、氏の温容に接すれば、怒氣は直に散し、憂愁は忽ち消えて、莞爾と笑を催し、いかなる下賤の身も、氏の威勢を假れば、一躍して王公貴人と化し、限りなく榮耀榮華を盡すことも出来、飢餓に迫りて死に瀕する貧苦の輩も、氏の恩恵に浴すれば、蘇生してふたゝび世の中に浮び出つることもできるを見るべし。又一國に就きたとへていはんに、その政治、教育、農工商の事業を盛大ならしむるも、幾百萬の兵を備へ、強大の軍艦を製し、堅固の砲臺を築くなど如

何なる防備をなすも、皆氏の方寸にあれば、一國の盛衰強弱すべて黄金氏の双肩に懸るとは、嗚呼盛なりといふべし。傍の席に黄金大人の弟なる白銀氏、光耀く眞白の顔色を呈し、着座せり。氏のまた社會に對して有する勢力の盛大なるはいふまでもなければ、その眞價は義兄の黄金氏には到底及ばざるなり。黄金氏の従弟の白金氏といへる一紳士も、同じくこの席に連れり。氏は他人の攻撃を受くるも、殆ど負を取らぬほどの剛情者なれども、いかなるゆゑか、蛞蝓に鹽の譬にて、殊に亞留加里氏に對しては一言半句も出でず、頭のあがらぬところあり、月に村雲花に風自

然配合の妙はこゝにあらん、氏の學問界に於ける功績につきては著しきものあれども、一般の經濟社會に於ける勢力は、黄金や白銀氏の如くならずして、甚だ微弱の境遇にあるは氣の毒なる次第なり。

狩雨霧と名取雨霧といへる二人は、双子の如くよく似たる兄弟なるが、いづれも其舉動は活潑にして敏捷の人物なり。外貌には一見強硬の態度を装へども、彼等に親しく交はる者は、極てその軟弱の性質なるを知るといふ。

良獸夢氏は室の片隅の薄暗きところに座を占むれども、その赫々たる威勢は電氣燈に照應し室内に限

なく耀けり。氏は近頃佛國のキユリー氏夫婦に頼りて世に紹介せられたる若冠の人物なれども、學界に貢獻せるもの少からず、眞に理學に一新紀元を開きしものといふを得べく、尙ほ將來最も有望の人士なり。亞留美氏はその容貌よく白銀氏に似たれども、貫目に乏しく輕々にして、到底白銀氏に及ぶべくもあらず。氏が從來あまり世にもて囂されざりしは、その天賦の性質が出世を妨げ立身の道を困難ならしめたるがゆゑならんか、されど近年にいたり、大に頭角を顯はし、將來有望の人士と見做さるゝにいたりたり。

H  
V  
H<sub>2</sub>O  
H<sub>2</sub>e  
H<sub>2</sub>  
水素、窒素、餅煮屋、沼氣などいへる心浮きたる連中も、  
けふの團欒に列しをりたれども、彼等はちよつと人  
目につかざる扮装をなしをるのみならず、多人數寄  
集りたる中のことゝて、その着座せるところが、いづ  
れの人にも容易く氣附かれざりしが、餅煮屋だけは  
さすがに鹽さんに由りて忽ち見出されたり。  
室の一方に、いつもの如く、身に鈍赤色の衣服を着し、  
少しも愛嬌のなきかたくるしき顔色をなし起立せ  
る紳士は、鐵君にして、世界の人類中君の名を知らざ  
るものなく、又君の庇護を蒙らざるものなかるべく、  
眞に人生に有要の材として尊敬せられ、又文明世界

の誘導者として歓迎せらる。いはゆる文明の利器な  
るもの、一つも氏の力に由りて成らざるもの殆どな  
かるべく、たとへていはんに、小は一家の臺所道具よ  
り諸種の器具、機械にいたるまで、大は幾百斤の巨砲、  
幾萬噸の軍艦も、これを動かす機關も、大河に架せる  
橋梁も、懸巖絶壁にかくる釣橋も、列車を運ぶ機關車  
も、これを載する軌道も、幾十階の大厦高樓も、皆悉く  
氏の經營に由りて成らざるはなし、實に人間社會の  
事業には、大となく小となく力を致さるゝことの大  
なるは、眞に驚くばかりなり。尙ほ氏は將來學術の進  
歩と、ともに、社會に對しいかなる偉大の事業をなす

か到底想像の及ばざるところなり。光輝燦爛たる顔色を有する紳士は肉蹴氏なり。人の弱點を庇護する技能に長するがゆゑに、近年世人競うて氏を迎へ、その長所を利用するもの多し。錫氏、亞鉛氏などにも、また同じ長所あり。殊に錫氏は鐵氏に對しては有力の股肱なれども、口さがなきものは彼を無力など稱す、これは恐らく中傷的の惡口ならん。垢の附きたる薄穢き顔色の鉛氏は、生來尻の重き人物にして鐵砲玉などの綽號もあり、されど氏の獨特の性質たる從順と無頓着とが大に世人の歡迎を受くる原因なりといふ。輕秋霧は隨分廣く世の中に

名を知られたる人物なれども、平常あまり世間に顔を出さぬゆゑ、氏を親しく知るものは甚少し、されどけふの大會には特に列席せるが、氏は狩雨霧、名取雨霧などは親戚の間柄なり。氏自身は社會の事業には、絶えて手を出さざるも、その家族中に石灰などいへる多能の人物ありて、社會に調法がらるゝ故、從て氏の名も顯著なるに至れるならんか。元素以外に於て、この盛會に賓客として招待を受けたる紳士の中、その主なるものは親和、原子價、反應、電離、伊恩、平衡などいへる濫い顔色の理屈張りたる堅苦しき容貌の老先生達なり。いづれも元素やその脊

屬よりは非常の尊敬を受け、いかなる六かしき事柄にても、親しくこれらの諸先生達に就きてその説明を聞かば、忽ちよく了解し得べし。又元素中の結婚は必ず諸先生の媒介を要し、又不幸にして離婚の騒ぎ或は喧嘩争論など起る時は、その仲裁に由りて折合も附くことあれば、實に元素間には師父として諸先生を仰ぐといふ。

後れ走せに、室内に入來りたる紳士は、單純なる輕裝をなし、快活の顔色と敏捷の風采とを有する酸素氏にぞありける。社會の交際最も廣く、何事にもよく世話を焼ける人物にて、元素中氏と交情なきものは殆

どこれなく、元素社會の人望家なれば、氏の顔を見るや、滿堂の人々の中、氏に對し或は萬歳を唱ふる者あり、或は周圍に寄集りて握手の禮をなす者あり、或は追従の辭を陳ぶる者あり、氏もまたこの會の委員に撰ばれ、しかも委員長として推さるゝといふ。

酸素氏の入來れるを相圖に、大食堂の扉は開かれたり。こゝに於て紳士は貴婦人を助けて、いづれも思ひくゝに食堂に入り、あなたこなたに多く並べたる蠟石や大理石の小卓子に、種々の樂しき小團體をなして、別々に席を占めたり。堂の正面には、矢張り赤地にレトリト形を白く染めぬきたる旗を交叉し、天井や

周囲の壁は、一面に金剛石、ルビー、トハツズ、エロシダ  
ム、水晶などあらゆる寶石の結晶を以て飾られ、これ  
がまた電氣燈に映して耀き、その美しきこといはん  
方なく、玉の臺たいとはかゝる所をやいふならん。堂の中  
央には、大なる卓子を据ゑ、これに種々の美麗なる花  
卉を飾り、その馥郁たる香氣は堂内に満ち、爲に精神  
は恍惚として五體も麻痺しびれんばかりなり。又同じ卓  
上の皿に佳肴美菓は山の如く盛り揚げられ、酒は泉  
の如く卓上の壘いしに満ち、眞に山海の珍味この堂中に  
あつまれりといふも僻言ひがことにはあらざるべし。やがて  
立食の宴會は生まれり、紳士連はいそがはしく卓上

の肴菓を取りて貴婦人達に供し、いらざる諂辯ねづかを並  
ぶるなど、種々の小團體があなたこなたの小卓子を  
圍んで、心置きなく互に打解け、快談快話して樂み、葡  
萄酒や三鞭酒は、彼の亞留凍嬢あしゆとうじやうや炭酸嬢たんさんじやうの盃盤の間  
を幹旋するありて、頻に人々に勧められければ、いつ  
れも微醺を帯び、殊に貴婦人の頬には、薄紅の色を湛  
へて、興はますます深くなり、樂しき笑聲は堂中を壓  
し、互に親和共睦の情の厚き、その友誼心の温かなる、  
眞に溢るゝばかりなり。折から大喝一聲諸君とさけ  
ぶ者あり、驚き見れば別人ならず、委員長の酸素氏な  
り。拍手の聲は食堂を震動せしめんばかりに湧き、氏



は喝采聲裡に大卓の傍に起立して簡単に述べてい  
はく、

四二

紳士、貴婦人。私は諸君のご推撰に由りまして、不  
肖ながら本大會の委員長たる光榮を有します。こ  
れは、畢竟諸君が私を愛せらるゝの致すところと  
存じ、深く感謝いたします。ご承知の通、物質界に於  
きまして、私の作用を要すること極めて多くござい  
ますゆゑ、私は種々様々の方面に亘りて、干渉いた  
さねばならぬ大繁忙の身にて、殆ど寸暇もなき有  
様でございますから、今日もこの大任を扣へなが  
ら思はず遅参いたしました、何んとも相濟まざる

次第でございます、然し止むを得ざることゆゑ、諸  
君の宏量なる固より私の罪を恕せらるゝことゝ  
信じます。

今日會合の諸君の中には、空氣よりお出でになり  
たる方もあり、或は河や海又は地中より態々歩を  
枉げられたる方もあり、或は動物界又は植物界よ  
り遙々ご光來の方もありまして、古今未曾有の盛  
況を極め、和氣は藹然として堂に満ち、いかにもご  
互に愉快この上なきことに存じます。殊に我等元  
素社會以外の親和、原子價、電離、伊恩、平衡等の諸先  
生のご臨席を辱うしましたるは、我社會に於きま

四三

して、最も光榮といたすところでございます。特に我社會が最近二三十年間に於きまして、學界に目覺しき長足の進歩を與へまして、殆ど舊來の面目を一新しましたるは、偏に諸先生の指導誘掖に賴ることゝ存じますから、私は元素及其の眷屬に代りまして深く感謝いたします。

この大會の主旨は、我社會の者共が將來一層堅く親和協力いたしまして、種々の結合體を組織し、若しくは場合に由りましては個々別々に分離して、化學界の開拓進歩に力を致し、以てますます人間の智識の増進を圖り、間接には國家の進運を裨益

することを獎勵する目的なるは、今私がこと新しく申すまでもないことでございます。そも、國家の實力は主として工業に俟たなければなりません。工業の發達は學問の眞理に基かなければなりません。而して工業中化學なる學問の力に賴らざるもの殆どございません。化學は我が領分でございます。ゆゑに我領分内に尙ほ存在しまする不毛の地はこれを開拓いたし、又領分内より有爲の新人物は續々これを出して、化學の基礎を益々強固にし、又擴張し、進んでは國家實力の隆運を補翼せんことは我社會の本分と存じます。依て將來ご

互に奮つてこのことに勤めんことを切に希望いたします。

こゝに特に一言申陳べ置きたきことがございませが、從來我社會に於きまして、學問や工業界や其他一般社會の爲に貢獻いたされ、その功績顯著にして我社會の名譽を發揚されたる方々は實に多くありまして、私が今喋々するまでもございませんが、就中この席にごさる良獸夢君は我社會に於ける有爲の新人物にして、尙ほ年齢も若く世の中に頭角を顯はされて、まだ多くの歳月を経ざるにも拘らず、不世出の才を以て學問界のために力を

盡くされ、已に君の貢獻せられたるもの頗る多く且極めて貴くして、學問に一新紀元を開き、恰も暗黒に光輝を放てる觀を呈し、誠に我社會の面目に一段の光彩を添へられたれば、私は一同に代り一言感謝の意を表します。

次に簡單に報告いたし置きたきは卓上の飾附飲食物其他食器などのこととでございます。これはすべて有志諸君よりご寄附になりましたので、まづ飾附の香氣芬々たる美しき花は主として植物界の惠須照諸君より寄附されました。陶磁器の花瓶、皿、茶碗などは亞留美君と珪さんとの合同にて寄

四八  
附されましたが、その染附は主に古張戸君の親戚  
なる吳須君に由りて施されました。ガラスの器は  
輕秋霧君と名取雨霧君と珪さんとの三方より協  
力してご寄附になりました。野菜類は炭素未亡人  
と水素君と拙者、又肉類はすべて右三人の外に窒  
素君が更に加はりて、いづれも寄附いたされたの  
でございます。ご覧の通卓上に岩の如く積み揚げ  
ある殻のまゝの蠣は、炭酸輕秋霧君が海中より自  
ら荷うて運び來られて、ご寄附になりました。又ア  
イスクリームのピラミッドは、塩さんの親戚なる  
食鹽君と淡水君の令弟なる凍氷君とに由りて製

造せられ、その香料は藥劑師の枸櫞油君や馬尼林  
君より寄贈になりました。鋼のナイフは鐵君と炭  
素未亡人との共同寄附。フォークは白銀君や肉蹴  
君の寄附でございます。又酒類は主に、砂糖氏が自  
ら釀造して寄贈されました。就中三鞭酒の寄附に  
は炭酸嬢も加入されて居られます。  
かくの如く、今回の馳走はいづれも趣向に趣向を  
盡くし、粹に粹を極めたるものにて、有志諸君が少  
からざる勞力を費して自ら製造せられ、又は精神  
を込めて寄贈せられたる貴き山海の珍味より成  
立てをります。依て諸君は有志諸君のご好意とそ

の心勞とを味はれて、緩々と充分に歡を盡くされんことを希望いたします。

と述べ了れば拍子喝采の聲は割るゝばかり、まばし鳴りも止まざりけり、酸素氏は尙ほ再起立して、

我々社會の者が師として仰ぎ、父として敬ひ尊ぶところの碩學諸先生の健康を祝せんことを發議いたします。

と述べればいかでか異議のあるべき、滿堂の人々熱心に歡迎して手を打鳴らし、一同起立し、高く三鞭の杯を舉げ、諸氏の健康を祝したるに、親和先生は大家諸氏を代表して一同の優待、厚遇を謝する旨の辭を

簡單に述べて、嬉しき手を以て三鞭の杯を舉げ、元素とその眷屬との健康を祝したり。一同は更に大に打解けて飲みつ食しつ、興は益々深くなりければ、起つて發聲自慢の水素を煽動たぎるものあり。水素は忽ち起立して、やつきとなりて唱ひ出し、その音聲一調は高く一調は低く、いかにも優美に面白く愉快に楽しく聞えけり。

夜もいたく更け、酒もよほど巡りければ、一人二人と漸々食堂を辭し、終に一同残らず前の談話室に移り、こゝに又面白き世間話は交換せられ、益々進んで佳境に入り興もいよく深からんとする時、突然給

五三  
仕のあわたゞしく走りきたりて大聲を揚げ、硫化水素氏のお出でゞございますと述ぶるや、一同は非常なる驚愕を以て打たれ、しばし無言にて互に顔と顔とを見合せ太息をつくばかりなりしが、やがて硫化水素は室の扉を開いて入來れり、その顔を見たる金屬派の人々は忽ち顔色を變じ或は黒く或は赤く或は白くなり、中には床上に沈澱せるものありて、その騒ぎ一方ならざりし、抑もこの硫化水素は均しく硫酸黄氏の一族なれども、世人の尊敬厚き硫酸氏などは雲泥の差あるものにて、常に醜陋の行爲多く極めて不道德の人物なれば、元素社會にては常に排斥して

殆ど誰一人も顧みる者なく、固よりこの大會に列せしむべき人物ならねば、わざと彼には開會の通知をも發せざりしが、いつしかこの催しあるをひそかに聞出だし、會て己れ獨り元素社會の仲間外れとなされたるを遺恨に思ひ居る折柄なれば、今日こそは平常の鬱憤を晴らしくれんとて入來れるものから、兩眼には血の涙を湛へ、齒を食ひしばかりて、その怒れる顔色の凄じきこと、身の毛慄つばかりなり。このとき室の一隅に少しも驚ける態度なく、泰然として立てる格魯偏夫人は心の中に思ふやう、おのれ憎き硫化水素かな、汝如き下種下郎の分際にて、押し強くもこ

13/3/105

の嚴なる席へ足を踏み入れたるぞ、席の穢はいふまでもなく、我等に對し侮辱を加へたることの極みなる、とくくそこを去らざれば、我は汝を取殺して分解なしくれんと、口先には出していはざれど、その意氣込の鋭きこと、迎も當るべからず、既に長き衣裳の裾を引きずりつゝ、疾風の如く床を蹴立て、今しも摺みかゝらんとする音に驚き目覺れば、全く南柯の夢にして、これぞひとりの學生が、長閑なる春の日和の心地よさに、化學の講義を聞きつゝ、覺えず睡に入りて、今や講義濟みたりとて、學生達の足音高く、堂を競ひ出る時なりし。

五四

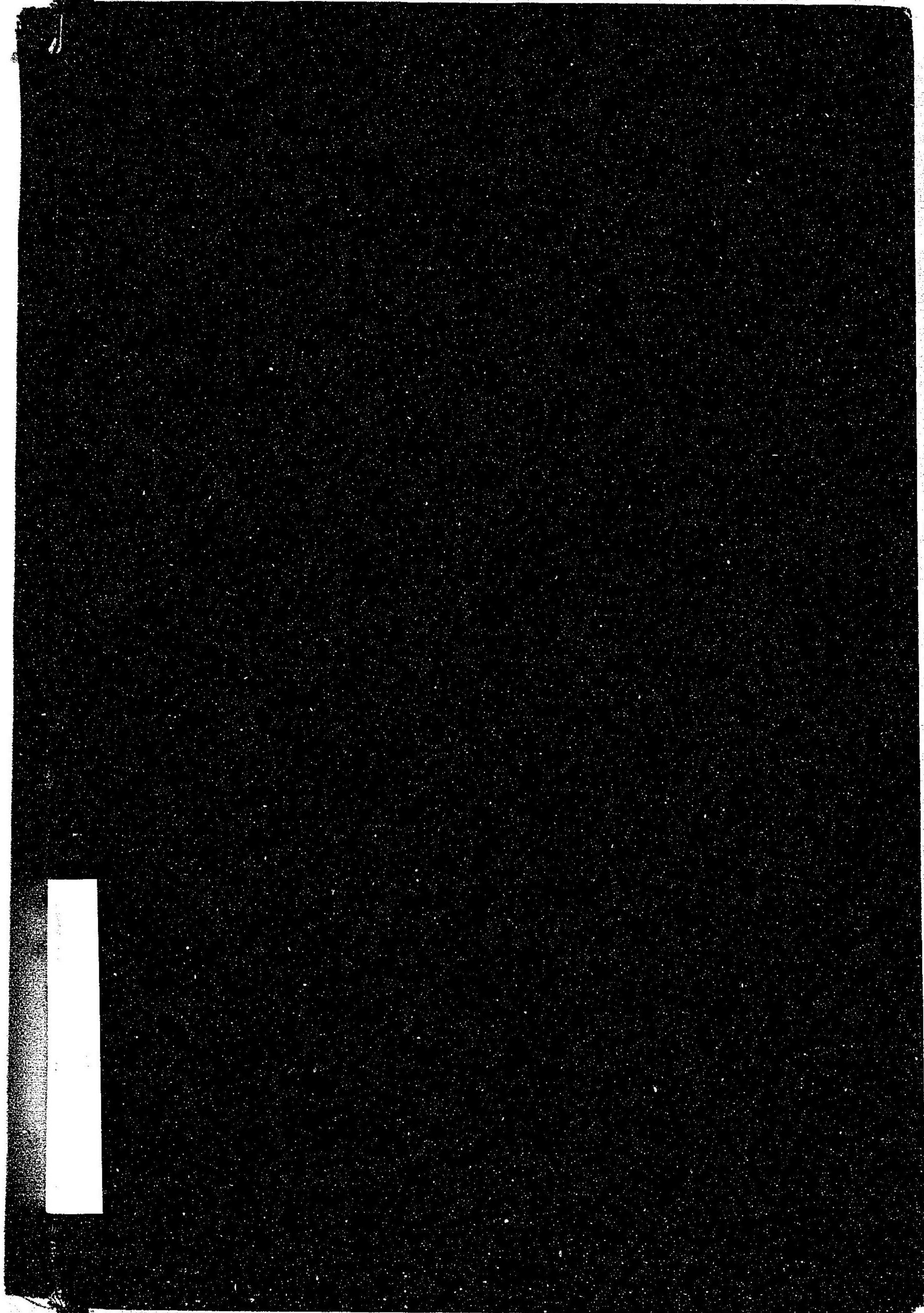
(をばり)

65

丸印七  
丸印八  
丸印九  
丸印十  
丸印十一  
丸印十二  
丸印十三  
丸印十四  
丸印十五  
丸印十六  
丸印十七  
丸印十八  
丸印十九  
丸印二十

33  
466





[A small, vertical white rectangular area, possibly a label or a piece of tape, is located on the left edge of the black area. It is oriented vertically and contains some faint, illegible markings or text.]

33  
466

055855-000-0

33-466

化学者の夢

久原 躬弦 (戦々道士) / 著

M39

CAJ-0104



